

六角陶房

作る&使う喜び
陶芸の道を楽しむ



初心者にはヘラやワイヤーなどの作業道具一式を購入して、1年で基本をしっかり身に付けてから、本格的に自分の作品作りに入っていく。



◀午前中は経験者、午後は初心者の教室が行われているが、みんな顔見知り仲がいい。



▶電動のろくろを使って均等に成形するには、かなりの技能と経験が必要。

ニューヨーク州サミットの静かな住宅地。毎週水曜日、陶芸家の理津子ムーアさんが主催する陶芸教室「六角陶房」が開催されている。

15年前にサンフランシスコのカレッジで陶芸教室を始めたムーアさんは、2008年にニューヨークに移ってから、自宅スタジオで教室をスタート。教室の傍ら、自作の陶芸販売やコンテストへ参加などの活動も続けている。世界各地に陶芸はありますが、歴史的、芸術的に優れている

日本の陶芸は海外に誇れる文化です」とムーアさんは話す。

通常15〜16週間で基礎をマスターして初心者クラスを終了した後は、レベルや経験に合わせて、自分の作りたい物をムーアさんに相談しながら作成していく。まず、指で土をつまんで上にあげて行く「玉作り」という技法で湯のみや茶碗を作るところから始まり、最後の色付けに至るまでは7段階の習得すべきステップがあり、その道は長い。基礎は粘土をこねて手で

ろくろを回す「手びねり」で、電動のろくろを用いる前に最低1年は手だけで「ひねる」という。基本を練習中の柏瀬修子(なおこ)さんは、「粘土を成形する時の指の使い方や力の入れ具合が難しいですが、すべてが初めてで楽しいです。先生は褒め上手で、見守ってくれながらできないときには救ってくれます」と話す。同じくヒギナーークラスの堤直美さんも、「いつになつたら自分の納得いく作品ができるのかなと思います。最初に作った茶碗が斜めに

傾いてしまった時はがつくり。技術の差をまざまざと感じました」と、陶芸の奥深さを感じてきたそうだ。

受講歴2年になる塩野愛(めぐみ)さんは、大きな装飾用のランタンを作成中。「大きな器の場合は、中に新聞紙を入れて形を整えるといいよ」とのムーアさんのアドバイスにうなづく塩野さんは、「これはヤバイな、という時に先生がうまく手を差し伸べてくれるんです」と笑い、「自分で作ったマグやお皿などを食卓に出すと、子供が喜んで

くれます」と顔をほころばせる。慎重に電動ろくろを回している受講歴5年のコネリー昌子さんは、「陶芸は物を作る喜びをもたらしているときは無心になれる。先生の技術と人柄が素晴らしいので、とても楽しいです」と話していた。

作品はスタジオの釜でムーアさんが焼き上げてくれる。釜から出すまでどんな色合いになるか分からないので、みんな不安と楽しみが入り交じった気持ちで待ちがられている。

今週の先生



理津子ムーアさん

教室では実際に作りながら細かく指導して行きますが、皆さんには楽しくおしゃべりしながら刺激を与え合ってほしいです。陶芸には自分の欲しい物を自分で作る楽しさと、出来上がった作品を自分で使う楽しみがあるので、そんな作陶の楽しみをぜひ味わってほしいです。陶芸の奥深さや形や色の持つ世界、歴史に触れて感動することで、作る楽しみが広がっていきます。

この指とまれ!

Rokkaku Ceramic Studio

毎週水曜日の午前9時から午後11時30分までと正午から午後2時30分まで、ニューヨーク州のサミットの自宅スタジオで行っている。各クラス定員6人まで。体験クラスも随時受付中。毎年2月に生徒の陶芸作品展を開催。来年はサミット図書館で開催予定。
www.ritsukomoore.com

募集

編集部では「みんなの広場」に登場していただけの団体を募集しています。掲載を希望する場合は活動内容を明記の上、「みんなの広場」係までご連絡下さい。
FAX: 212-431-9960
reader@nyjapion.com